

自然のマスツーリズム化について： 19世紀のナイアガラの滝を事例に

A Study about Mass Tourism in Nature: A Case Study of Niagara Falls in the 19th Century

羽生 敦子*
HANYU, Atsuko

Abstract: In Japan, we tend to appreciate the beauty of waterfall with its natural surrounding like trees and flowers, i.e, a way of appreciation of picturesque gaze. Picturesque scenery is often preferred in this country. In addition, the waterfall is a place of spiritual and physical training, in other words, the falls would be nature objects where human beings overcome their fears or anxiousness by stepping right into the fall and let its water pour over the whole body. As for the Niagara Falls in USA, we can admire the falls alone. In the 19th century, the experiences of sublime were told by many tourists. It became a cliché of the Niagara Falls and this sublime experience was a must. At that time, Hudson River School was founded, and started an art movement for paintings. Its technic helped to express the American nature i.e, American sublime. Especially Frederic Church's pictures of Niagara Falls which was circulated as post cards contributed to spreading its image all over the world. In 1830's, the observation facilities for tourists like Terrapin tower were constructed to show American sublime. The tourists could consume the sublime experience that we call now thrill.

For the early tourists, the Niagara Falls was completely a holy place (sacred place) because of its huge and mystic figure. But the Niagara Falls was transformed into a touristic and an amusement place.

Key words: ナイアガラの滝 (the Niagara Falls), ピクチャレスク (picturesque), アメリカン・サブライム (American sublime), 旅行記 (travel literature), 観光地 (tourist spot)

- | | |
|--|--|
| <p>I はじめに
1) 滝について
2) 滝の日本的楽しみ方あるいは滝との対峙
3) 日本的鑑賞の仕方</p> <p>II ナイアガラの歴史</p> <p>III サブライムについて</p> | <p>IV ナイアガラの描かれ方：「発見」からメディア媒体としてのハドソン・リヴァー派の描くナイアガラの滝まで</p> <p>1) ヨーロッパ人の描いたナイアガラ</p> <p>2) アメリカ人の描くナイアガラ：ハドソン・リヴァー派</p> |
|--|--|

*立教大学観光研究所・研究員

- V ナイアガラを目前にする観光客たち
 - 1) アメリカ人マーガレット・フラーの旅 (1843)
 - 2) イギリス人イザベラ・バードの旅 (1854)
- VI 聖地ナイアガラと観光地化するナイアガラ
 - 1) アメリカの社会的状況による「聖地化」
 - 2) 「聖地」においてマストなサブライム
 - 3) 「サブライム」を体感するための施設と観光客
- VII おわりに

I はじめに

1) 滝について

滝は伝統的な（自然）観光資源のひとつである。日本でも、華厳の滝、吹き割れの滝、袋田の滝など枚挙にいとまがないが、いずれも人気の観光地である。世界では、近年、南米のイグアスの滝、アフリカ大陸ではヴィクトリアの滝が人気であり、ヨーロッパではスイスのアルプス地方にラインの滝やライヘンバッハの滝¹⁾などの名所がある。しかし、もっとも知名度が高いのは北米のナイアガラの滝であろう。前述したイグアスの滝、ヴィクトリアの滝と並び世界三大瀑布のひとつとされる。「瀑布」と称されるこれらの滝は規模も大きく、国境を形成することも特徴とされる²⁾。

日本語では「瀑布」という単語があるものの「滝」との表現で一本化されてしまう傾向にある。「瀑布」とは小学館デジタル大辞泉によると、「高い所から白い布を垂らしたように、直下する水の流れ。滝。飛泉。『ナイアガラ』《季夏》と説明される。本稿では、「瀑布」とは、この定義に加え、国境を形成するような規模の滝と位置付け、基本的に日本やヨーロッパには存在しないものとして考える³⁾。

英語では、(water) falls や cascade、フランス語では cascade, chute, cataracte, saut など「滝」を指す語は、いくつかあり、その形状や水量を基準とした学術的表現、たとえば地理学では saut が使われる傾向がみえたり、あるいは抒情的な感覚から chute や cataracte などを使用している

傾向にある。ちなみに一般的に英語の (water) falls がフランス語では chutes と訳される。

『小学館ロペール仏和大辞典』によると chute には瀑布との説明もあり、Niagara Falls は les Chutes de Niagara と訳される。一方で cascade は滝、滝状のものとの説明があり、日本の滝は cascade であろう。とは言え、同一単語の反復を回避するために、ナイアガラに関する旅行記では、cascade, chute, cataracte, saut⁴⁾ など混在して使用されている。

2) 滝の日本的楽しみ方あるいは滝との対峙

日本人と西欧人では滝への宗教的感覚や美的感覚もことなる。「瀑布」のない日本では、古来より滝は修験僧の修業の場、つまり精神的な教練の場でもあった。滝行のように、「水」との身体的な関わりほかに、滝を上方から下方へと覗き込む、「高さ」という恐怖心を克服するための修練場でもあった。滝と対峙することは、自分自身との対峙であり、自然界、あるいは目に見えない聖域への対峙であった。対峙することが可能な滝、換言すれば滝は人間でも「克服可能な」対象物と考えていたのではないだろうか。

3) 日本的鑑賞の仕方

滝は鑑賞対象物である。日本では滝だけを鑑賞するのではなく、滝を取り巻く環境とともに楽しむ傾向にあるのではないか。季節ごとの植物、あるいは紅葉する木々を盛り込みながら全体の風景の一部としての滝を鑑賞する。これは、いわゆるピクチャレスク的な鑑賞の仕方である。ピクチャレスクとは18世紀にイギリスで流行した美学であり、ピクチャレスクに風景を見るための技法や、「クロード・グラス」などの小道具もあった。

ピクチャレスクの技法とは自然風景を描く際に何かしらの人工物を画面に導入して、自然と人為との対比という構成によって自然の大きさを表現し風景画として完結させることである。たとえば、ギルピン (Gilpin, William, 1724-1804) の風景画では、家屋、塔、僧院、城郭、道路、橋、帆船などの人工物や人物が描かれている。また、ピクチャレスク手法において、単純な直線は好まれ

ず、直下型の滝などはその範疇に含まれない。

前振りが長くなったが、本研究のテーマである「瀑布」の消費の仕方について以下の通り考察を進める。瀑布の代表格であり、19世紀、アメリカにおいていち早く観光地化の進んだナイアガラを対象にする。ナイアガラの公式発見者エネパンの記録（1697年）、1792年にアメリカを旅したシャトーブリアン（René-François de, Chateaubriand, 1768–1848）、1842年のディケンズ（Charles John Huffam, Dickens, 1812–1870）、1843年のマーガレット・フラー（Margarette Sarah, Fuller, 1810–1850）、1856年のバード（Isabella Lucie, Bird, 1831–1904）、さらに1867年のマーク・トウェイン（Mark, Twain, 1835–1910）の旅行記を中心に研究を進めた。

II ナイアガラの歴史

ナイアガラはアメリカ合衆国のおそらくもっとも古く、もっとも有名な観光地であるが、その「発見」の背景にはフランス人とフランスの歴史がある。「発見」された当時、ナイアガラは「ヌーヴェル・フランス」、つまりフランス領の地域にあった。

「発見」までの概略は次の通りである。1534年、探検家ジャック・カルティエ（1491–1557）はガスベ半島に十字架を立て、仏領宣言する（ヌーヴェル・フランス）。1608年、サミュエル・ド・シャンプラン（1567 (?)–1635）が、ケベック市（ヌーヴェル・フランスの中心都市）を建設する。1675年5月、ルイ14世がラ・サール（1643–1687）、宣教師エネパン（1626–1705）らをヌーヴェル・フランスに派遣する。1678年、ラ・サールがルイ14世の名により新しい土地を植民地化したこの年、エネパン一行がナイアガラに到着する。エネパンはケベックでの布教活動のために、ネイティブアメリカンの言葉や文化を習得しており民俗学的研究にも貢献している。1682年ラ・サールはミシシッピーまで植民地領域を拡張し、その流域を「ルイジアナ」と命名する。1683年ルイジアナについての記述 *Description de*



図1 ナイアガラの前に立つエネパン神父

la Louisiane の中でエネパンが初めてナイアガラの滝について言及する。実はエネパンより35年前にイエズス会派の宣教師がナイアガラを訪れたといわれているが、正式な記録がない。1697年エネパンは『アメリカの巨大なる土地の発見』*Nouvelle découverte d'un très grand pays situé dans l'Amérique, entre le Nouveau Mexique et la terre glaciale*⁵⁾においてより詳細なナイアガラの滝についての記述とその銅版画をのせた。この記述をもって彼はナイアガラの「発見者」と言われる。

フランス国立図書館のサイト Gallica では、17世紀の古書であっても、無料でダウンロードが可能である。『アメリカの巨大なる土地の発見』の中の「ナイアガラの滝」に関する記述の一部を以下に示す。

Entre le Lac Ontario et le Lac Erié il y a un grand et prodigieux Saut, dont la cheute d'eau est tout a fait surprenante. Il n'a pas son pareil dans tout l'Univers (...). Au pied de cet affreux saut on voit la Riviere de Niagara, qui n'a qu'un demi quart de lieüe de largeur. Mais elle est fort profonde en de certains endroits. Elle est même si rapide au dessous du grand Saut, qu'elle entraîne violemment toutes les bettes sauvages, qui la veulent traverser pour aller paturer dans les terres, qui sont au delà, sans qu'elles puis-

sent résister à la force de son cours. Alors elles sont précipitées de plus de six cents pieds de haut. La cheute de cet incomparable saut est composée de deux grandes Nappes d'eau & de deux Cascades avec une isle en talus au milieu. Les eaux, qui tombent de cette grande hauteur, écument & boüillonnent de la manière du monde la plus épouvantable. Elles font un bruit terrible, plus fort que le tonnerre. Quand le vent souffle au Sud, on entend cet effroyable mugissement à plus de quinze lieües.

オンタリオ湖とエリー湖の間に、大きく、驚異的な滝がある。その水の流れは驚くべきもの以外何でもない。この世に二つとない姿である。[……] この恐ろしい滝の下には、ナイアガラ・リヴァーが見える。この川の幅は8分の1リユードほどしかない。しかし、ところどころはとても深い。滝の下方は、流れもまだ速く、向こう側の土地に餌を食べに行こうと川を横切る野性動物たちを、かれらが抵抗する間もなく、激しく飲み込んでしまうほどである。動物たちは高さ600ピエのところで突き落とされるのだ。この類い稀なき滝は、厚い膜ようになった水流二面とその水が落下する二つの滝で構成されている。滝の間の斜面には中州が一つある。この高さから落ちてくる水流（滝）は、この世のあらゆるかぎりのおぞましいやり方で、泡立ち、うねっている。滝は轟然たる大音響で、雷鳴をも勝る。風が南へと吹くときは、15リユード離れたところでもその恐ろしいうなり声が聞こえるほどである。

視覚的には、prodigieux（驚異の）、effroyable（恐ろしい、ぞっとするような、身の毛もよだつ）、surprenant（予想だにしない、驚くべき）なものであり、滝の音は bruit épouvantable（恐ろしい、ぞっとするような）、effroyable（effroyable, 恐ろしい、ぞっとするような、並外れた）騒音であった。可能な限りの誇張表現が用いられている。

Ⅲ サブライムについて

ヨーロッパの滝は、ピクチャレスクな美として鑑賞されるが、ナイアガラの美を表すクリシェとしては sublime（サブライム）がとりあげられる。サブライムは日本語では崇高⁶⁾と訳される。美とサブライムが芸術学的に論じられるようになったのは周知のとおり1757年のエドモンド・バークによる『崇高と美の観念の起源』であった。当時の流行していたピクチャレスクな美に対応する美としてのサブライムが明らかになる。ギルピンの描く、ワイ川の牧歌的な自然風景が典型⁷⁾であるピクチャレスクに対しバークは恐怖感を伴う「美」、文学作品ではバイロンやシェリーの作品で表現されるものであり、視覚としてはアルプスの風景や稲妻などに表現される美である。さらに、聴覚由来の「美」もサブライムの対象となる。滝の音や、嵐、雷鳴なども「美」として捉えられる。ナイアガラの滝の爆音もまたサブライムの対象である（Revie, 2003）。

Ⅳ ナイアガラの描かれ方：「発見」からメディア媒体としてのハドソン・リヴァー派の描くナイアガラの滝まで

Revie（2003）は *The Niagara compagnons* で、また奥戸（1987）は『ユリイカ』の特集「旅のフォークロア」への寄稿のなかで、新大陸アメリカのナイアガラのサブライムがどのように理解され消費されるようになったのか、絵画の画法の発展に注目することで、検討している。Ⅳ章では、ヨーロッパ人の描くナイアガラとアメリカ人の描いたナイアガラを検討する。

1) ヨーロッパ人の描いたナイアガラ

『ユリイカ』のなかで奥戸（1987）が述べるように、ナイアガラを観た者は「いままでの物の見方で、いままで見たこともない物を描写しなくてはならなかった」（奥戸、1987：95）。

ヨーロッパには、いわゆる「瀑布」がない。エネパンが、ナイアガラの滝の存在について報告したものの、テキストにおいても、銅版画において

も、前述したように「とにかく前代未聞の大きい滝」なのだろう程度の情報しか観た者にしか伝わらない描写であった。銅版画では、高さのありそうな滝の一部とそれを見る見学者たちにフォーカスされた画法（技法）である（というか技法が無かった）ため、ナイアガラを鑑賞する上で重要なことなのだが、3D的な映像感覚でナイアガラが描写されていない。ナイアガラの高さは表現できているが、しかし、その特徴である、滝の幅と地形にあることを認識する視線（まなざし）は不在である。

フランス人のシャトーブリアンは1792年にアメリカへと旅立ち、ナイアガラについての省察を旅行記に記している⁸⁾。ナイアガラの滝の下まで、壊れそうな縄梯子つたいに下ろうとしたが、失敗し、原住民に助けられたこと、しかしながら、骨折をして一か月間滞在したこと、さらには、彼の乗った馬がガラガラヘビ（ナイアガラの表象のひとつ）にびっくりし、危機一髪のところでナイアガラへの転落を避けられたことなどが語られる。もちろん、ナイアガラの滝の流れの速さやその豊富な水量についての描写はあるが、全体像についての描写はない。

しかし、「怪我」や「恐怖」を連想させるテキストから、ナイアガラの魅力には、恐怖を内包した美があることを読み取ることができる。それをシャトーブリアンは「サブライム」と表現しているが、読者であるフランス人、あるいはヨーロッパ人が知りうるのはアルプス的「サブライム」であろう。つまり、山の賞賛としてのサブライムであり、「滝」とサブライムの関係については未経験であり、畢竟、滝にサブライムを見いだせなかったのではなかったか⁹⁾。

図2はアメリカ旅行¹⁰⁾の挿絵である。この絵の中心は語り手シャトーブリアンであり、「滝」は語り手のいる場所の意外性を示すに留まっている。読者には、テキストからも挿絵からも「サブライム」が伝わることはない。

2) アメリカ人の描くナイアガラ：ハドソン・リヴァー派

Revie (2003)によると、ナイアガラは、アメ



図2 ナイアガラの滝で足をすべらすシャトーブリアン

リカの絵画の世界においても「アメリカのエコール」誕生に貢献している。それ以前は、ヨーロッパの画法を模倣する、あるいはヨーロッパに学ぶことが絵画の世界においても主流とされていた。しかし、ヨーロッパにはない「瀑布」を描くことはそれまでの技法では不向きであり、ナイアガラを瀑布として描くことは、結果としてアメリカの絵画を確立することにもつながったと指摘している。

1803年アメリカ人ジョン・バンダリンが、「ナイアガラの滝の眺め」を完成させた(図3)。彼は「水平の線」を用い、より現実感のあるナイアガラの描写に成功し、アメリカン・サブライムたるものを表現した。翌1804年、「水平の線」に加え、イギリスで流行していたパノラマの手法、さらには瀑布の水量を描くための方法であるモニュメンタル法を用い、ナイアガラの属性である「瀑布」を表現した(図4)。ヨーロッパの技法をアメリカの自然の描写のために解体し再構成した結果である(奥戸, 1987: 100)。さらに、T. コールにより始まったハドソン・リヴァー派¹¹⁾と呼ばれる画家たち、とりわけチャーチの絵がメディア、例えば、絵葉書等で流通したことが、アメリカ



図3 ヴァンダリン (1803) ナイアガラの滝の眺め



図4 ヴァンダリン (1804) ナイアガラ西側の眺め



図5 チャーチ (1857) ホースシューの滝

カン・サプライムを周知させるきっかけとなった(図5)。

V ナイアガラを目前にするツーリストたち

チャーチの絵が、絵葉書等で流通し、かれの描くナイアガラを見たであろう(アメリカン・サプライムが表現される)旅行者の旅記を考察する。

1) アメリカ人マーガレット・フラーの旅(1843)

フラーは1843年にナイアガラを訪ねる。

実はナイアガラの滝に来た時に心に浮かんだのは、静かな満足感でしかなかった。なぜなら、この滝については、細部に至るまで、絵画やパノラマなどでよく知っていたからだ。そして、すでに知識として得ていた視覚情報を実際の風景の中に見つけていきながら、こ

の風景が以前と見た絵と全く同じであることに、私は満足感を覚えていただけなのだ。(高野訳, 2011: 11)

初めてナイアガラを発見した人はさぞかし幸せだったろう。彼らはこれらの風景について事前に絵やパノラマで知っていたわけではない。何も知らずにここに現れ、その感動はすべて彼ら自身の中から自発的に生み出されたものだったから。(前掲書: 21)

あまり感動できなかったことを吐露している。しかし、数日滞在の後には、

しかし、すっかり身近になった風景の崇高さは、なんとも言いようのない恐怖感をも私の中に呼び覚ましていたのだ。この恐怖感は今まで私が経験したことのないような種類のものであった。いわば死がまったく新しい装いで

姿を現わしたような感覚、これが私に襲いかかったのだった。たたきつける水の音が私の五感を絶えず支配し、その他の音は全く耳に届いてこない。(前掲書：12)

(前掲書：185)

とナイアガラの「崇高」に茫然自失し、なにか、自身が飲み込まれていくような様子が記述される。

さらに、滝について「ナイアガラに人間の苦悩と不安の感情を賦与せざるを得ない。滝が示す現象を見て、人は新たな感覚を体感するが、それは恐怖でも、驚異でも、尊厳でもない何かだ」と述べるが、これこそが、アメリカン・サブライムなのであろう。

2) イギリス人イザベラ・バードの旅 (1854)

- 一「あなたはナイアガラを見たことがある？」
- 一「いいえ」
- 一「それじゃ、あなたはアメリカの何も見ていないのと同じよ」

(高畑・長尾, 2014: 184)

これは、バードと某アメリカ人との会話である。バード自身は、「かなり幼少の時からナイアガラの名前をした」。あるいは「多数の絵から、馬蹄の滝の絵を非常に正確に書くことができた」と告白している。それ故、とくに見たいと思わない。しかし旅行中にナイアガラに歓喜する人に頻繁にあうことによってそのモチベーションが高まっていた。

上記の会話からもアメリカ人にとってのナイアガラは、アメリカのシンボル、あるいはアメリカを知るための聖地であり、アメリカのプライドであることが分かる。一方、バードはイギリス人であり、おそらくピクチャレスクな風景として「絵」に収まったナイアガラを熟知はしていたが、アメリカン・サブライムについて想像することができなかったのであらう。

バードは、現実のナイアガラを目前に

これ以上のものはない！—今、なんとすごいものを見ているのだろう。
あの遠くの洪水が立ち上がることで？
より愛しい美しい流れの何千が
私自身の山の国を潤す
そしてそこから荒野と大洋の路を超えて
彼らの野生の甘い声が私をよび戻した [……]

Ⅵ 聖地ナイアガラと観光地化するナイアガラ

1) アメリカの社会的状況による「聖地化」

1825年のエリー運河の開通によりニューヨークと内陸部が水路で結ばれ、ハドソン川上流のオールバニーとバッファロー間の運河が開通し、ナイアガラへの旅行者が飛躍的に増加した。1830年代には鉄道網も充実する。そして1865年に南北戦争が終結すると、いわゆる「金メッキ時代」が始まり、世界一の経済大国アメリカ、近代国家アメリカが確実なものになっていく。移動手段の充実、経済的余裕は余暇を生むが、富裕層の間で余暇活動(レジャー)としてのツーリズムが誕生し発展する時代でもあった。蒸気船が豪華客船として運行し、「文化」を求めた富裕層、文化人によるヨーロッパ旅行が流行した。

国内においても交通手段の発達により、移動が容易となり、アメリカの旅のゴールデン・ルートが形成される。その行程は、ハドソン川を辿り、The Catskills, Lake George, The Erie Canal, Niagara Falls, The White Mountains, Connecticut Valleyであった。ナイアガラは宗教的な聖地のないアメリカにおける「聖地」と位置付けられ、主要な巡礼地であり観光地となった。

2) 「聖地」においてマストなサブライム

19世紀の中葉の旅行記では、前述したように、サブライム体験が語られる。Sears (1989)によると、教養ある旅行者たちにとってサブライム体験はマストであり、ナイアガラ初日には感じられなかったサブライムも、数日すると感じるようになるのが一つの(旅行記の)パターンである。しかし、南北戦争前のアメリカ人にとってナイアガ

ラは聖地であり、畏怖と神々しさを感じ得ずにはいられなかった場所であったことも事実である。一方で南北戦争以後は、普通の観光客達が一樣にナイアガラを前に畏怖を感じるわけではなかった。理想の感じ方としてホーソーンなどのエリート観光客やディケンズなどの外国人の文学のレトリックがアメリカン・サブライムとして利用されていると指摘する。

1842年のディケンズの旅の中にみられるナイアガラへの描写は以下の通りである。

自分がいかにわが創造主の近くに立っているかを感じたとき、その途方もない大パノラマに対する最初の、そしてその後いつまでも続く一瞬間的で永久的な一印象は、「平安」であった。「心の平安」、静謐、死者への穏やかな追憶、「永遠の休息と幸福」への偉大なる思いであった。陰鬱さも恐怖もなかった。ナイアガラは、美のイメージとなって一瞬のうち私に私の心に刻まれ、胸の鼓動が止まるまで、変わることなく、消えることなく、そこにとどまることになったのだ、永遠に。

(伊藤ほか訳, 2005: 42)

エリート観光客であろうフラーも、はじめの感想は「絵で見たとおりだわ」であったが、最終日に激流が泡立ちながら深い峡谷へと静かに流れるのを見ながら、「私の心の中には、純然たる畏敬の念が沸き起こった」(高野訳, 2010: 20)と述べている。

以上のように、作家たちが壮大さ、畏怖さ、神々しさとしてのサブライムをナイアガラの美として語る。一方で、1820年代から30年代にかけて、ナイアガラの周辺には、セラピンタワー(1833)、インディアン製の製品を売る土産物屋、Barnett博物館(1840)、フランス人のロープ渡り(1859)などのアトラクションが展開される。Searsは*Sacred Place*の中で、1820年代にナイアガラは「すでに sublime な場所ではない。観光客に囲まれた sublime なふりをしたような場所になっている」(Sear, 1989: 12)と指摘する。

3) 「サブライム」を体感するための施設と観光客リスト

1833年には効率的にサブライムを鑑賞するためのセラピンタワーが完成する。バードやトウェインは、滝の裏側ツアーや激流を横目に壊れそうな階段を「恐怖」と闘いながら、下って行ったことが語られる。1854年のバードの滝の裏側ツアーでは、「一揃いの油加工した綿布」を渡され、その衣装について、「この奇妙な装備の外側は脂加工した綿布のフード、運送人夫の仕事着のような衣装、青いウーステッドのストッキング、あまりに大きすぎるインドゴムの靴」といった具合に、何人もの人々がすでに同じ衣装で出かけていたことをつくづく考えてみなければならなかったと語る(高畑・長尾, 2014: 197)。

トウェインも、「この服装は絵にでもなりそうだが、決して格好のいいものじゃない」と、全員同じ衣装に身を包んでのツアーの様子を皮肉を込めて語る。すでに、現在においても見られる観光地ナイアガラのそろいのレインコートを着た観光客の姿がある¹²⁾。

バードは、前述のように「サブライム」を体験しやすいであろう滝の裏側コースに参加し、スリルを味わった。しかし、ある日、巨大な滝の景観が見えるところに腰を下ろし、4時間近くもナイアガラを正面から見続けた結果、「滝の裏側は絵画の裏側をみるようなものだ」と結論を下す。しかしながら、おそらく普通の観光客たちにとって、施設はナイアガラのサブライムをスリルとして楽しむためには有効であったのではないだろうか。Searsは、サブライムのための施設は補助的な役割のはずであったが、結局は、その施設に行くことが目的となってしまったと指摘している(Sears, 1989: 18)。聖地ナイアガラよりも、観光地ナイアガラが前景化していった。

VII おわりに

観光資源としての滝のポテンシャルは高い。鑑賞の仕方は異なっても、多くの国や地域で「滝」は特別な資源である。アメリカン・サブライムの具現化のひとつがナイアガラの滝であるが、公式

発見者エネパン以来人間はその身体 (body) の大きさに圧倒され、あるいは圧倒され続けているのであろう。個人的体験であるが、初めてニューヨークの郊外の紅葉を見たときその自然の大きさに途方に暮れたことがある。人間が到底太刀打ちできない広さであった。滝に戻せば、日本の滝は、前述したように、なにか克服できる可能性があるゆえに、修練場として利用されるが、ナイアガラのように巨大な滝では、人間が克服できる要素はない。まずは「聖地」として扱われたが、それさえも超えて、「楽しみの場所」にしてしまうところが、人間が乗り越えられない事実に対するアメリカのアイロニーではないだろうか。

もちろん、アメリカン・サブライムは「大きさ」だけを対象としているわけではない。今後は、現在のナイアガラの滝も対象とし、研究を継続する予定である。

注

- 1) シャーロック・ホームズは、『最後の事件』のなかでモリアーティ教授とともに滝壺に落ちる。
- 2) ナイアガラの滝だけが、世界遺産に登録されていない。
- 3) 1927年4月9日、「新日本八景」の選定が『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』の紙上で発表された。その見出しに、「『日本新八景』の選定 選定八景 山岳＝溪谷＝瀑布＝温泉 湖沼＝海岸＝河川＝平原 各第一勝を募る」とあり、かつ読者への公募企画が明示された。「滝」ではなく「瀑布」としての選定が興味深いところである。結局この新八景で選ばれた瀑布は「華嚴の滝」であった。新田 (2010)。
- 4) 「フランス語 cascade (f) 滝、滝状のもの, chute (f) 瀑布 les Chutes du Niagara ナイアガラ瀑布 (ナイアガラには2つの滝があるので複数形) cataracte (f) 瀑布, 大滝 (複数) (旧約聖書の伝承で天の) 水門」。
- 5) 正式タイトルは *Nouvelle découverte d'un très grand pays situé dans l'Amérique, entre le Nouveau Mexique, et la mer glaciale: avec les cartes, les figures nécessaires,, de plus l'histoire naturelle, morale,,l'avantage, qu'on peut en tirer par l'établissement des colonies le tout dédié a sa majesté brinanni*. 1697. タイトル「アメリカの巨大なる土地の発見」は奥戸 (1989) による訳である。違和感が残るがここではこのまま使用する。
- 6) 古来論議の多い美的範疇の一つ。古代においてギリシア語 *hypsos* (高さ) の意義はさまざま論じられ、「崇高について」(作者はロンギノスに擬せられるが別人、1世紀ごろの著作) では魂を高揚させる価値にまで高められた。この精神的意義を得た「高さ」こそ、美学をはじめ倫理や宗教の領分でも見いだされる崇高の概念である。近世ではE. パークが「崇高とは危険を望見しつつ身の安全を確信できるところに生じる歓喜」と規定し、これを美と対比させて新たな美的範疇論の進路をひらいた (世界大百科事典 第2版の解説)。
- 7) *Observations on the River Wye* (『ワイ川紀行』)。
- 8) 1792年貴族であったシャトーブリアンは一種の亡命としてアメリカに渡る。ナイアガラにも立ち寄った。
- 9) シャトーブリアンの定義するサブライムは不明なところが多い。彼は、サブライムを感じるにはモンブランは大きすぎると言い、また「サブライムだと思っからサブライムなのだ」とルソーへの抵抗も見える。石井洋二郎 (2009), *Catel, Olivier* (2005)。
- 10) 『墓の彼方からの回想』に収録された「アメリカ旅行」に挿入されたもの。
- 11) ハドソン・リヴァー派のテーマはアメリカの発見、探検、移住であり、アメリカの風景、つまり自然の風景の中の神を表現した。ナイアガラにも「神」を見た = Holy なナイアガラを表現している。
- 12) レインコートを着たティペアがおみやげとして売られている。

文 献

- Catel, Olivier* (2005) *La revolution du sublime chez Chateaubriand*, Acta fabula 2005(6)3
- Chateaubriand, René=François de* (1982) *Voyage en Amérique Présenté par Pierre Barberis*, « Traversée du XIX^e siècle » Paris : J.-C. Godefroy
- 藤田治彦 (1991) クロード・グラスの映像. *Osaka University Knowledge Archive :OUKA*. 映像学 (44) 77-88.
- 石井洋二郎 (2009) 異郷への旅：旅するフランス作家たち. 東京, 東京大学出版会, 325p.
- 伊藤弘之, 下笠徳次, 隈元貞弘訳 (2005) デイケンズ アメリカ紀行 (上) (下) *American Notes and Pictures from Italy*. 東京, 岩波書店, 433p, 435p
- 勝浦吉雄訳 (1993) ナイアガラの一日. マーク・トウェイン短編全集. 文化書房博文社
- 亀井俊介編 (2009) アメリカの旅の文学. 京都, 昭和堂, 271p.
- MacGreevy, Patrick* (1985) *Niagara as Jerusalem, Landscape*, 28(2)31-35.
- (1994) *Imagining Niagara*, The University of Massachusetts Press.
- Melton, Jeffrey Alan* (2002) *Mark Twain. Travel Books, and Tourism: The Tide of a Great Popular Movement*, University of Alabama Press.
- 新田太郎 (2010) 「日本八景」の選定：1920年代の日本におけるメディア・イベントと観光. 慶應義塾大学アート

センター Booklet (18) 69-84.

小倉和子 (2000) シャトーブリアン『モンブランへの旅』について. 立教大学観光学部紀要 (2), 50-53p.

奥戸直人 (1987) アメリカン・サブライムの誕生: ナイアガラ, 巡礼から信仰旅行へ. ユリイカ 1987 (8), 青土社

Revie, Linda L. (2003) *The Niagara Companion: Explorers, Artists, and Writers at the Falls, from Discovery Through the Twentieth Century*, Wilfrid Laurier University Press.

Sears, John F (1989) *Sacred Places: American Tourist Attractions In The Nineteenth Century*, New York Oxford, Oxford University Press.

高畑美代子・長尾史郎訳 (2014) イザベラ・バード カナダ・アメリカ紀行 *The English woman in America*. 東京, 中央公論事業出版, 414p.

高野一良 (2011) 五大湖の夏 (マーガレット・フラー *Summer on the Lakes, in 1843* の和訳), 東京, 未知谷, 381p.

中島俊郎 (2007) イギリス的風景: 教養の旅から感性の旅へ. 東京, NTT 出版, 246p.

Henepin, Louis (1697) *Nouvelle découverte d'un très grand pays situé dans l'Amérique, entre le Nouveau Mexique, et la mer glaciale: avec les cartes, les figures nécessaires, de plus l'histoire naturelle, morale, les avantages, qu'on peut en tirer par l'établissement des colonies le tout dédié a sa majesté brinanni. 1697*

Bibliothèque nationale de France (gallica.bnf.fr)

<http://www.fabula.org/acta/document1075.php>

<http://nyfalls.com/niagara-falls/history/#1950>

<http://imaxniagara.com/niagara-falls-facts/>

<https://www.bl.uk/romantics-and-victorians/articles/landscape-and-the-sublime#sthash.XFUWAq6P.dpuf>

図の出典

図1 ナイアガラの前に立つエネバン神父

Nouvelle découverte d'un très grand pays situé dans l'Amérique entre le Nouveau-Mexique et la mer glaciale からの抜粋

図2 ナイアガラの滝で足をすべらすシャトーブリアン

http://www.larousse.fr/encyclopedie/images/m%C3A9moires_doutre_tombe_les_chutes_niagara/1312486 (最終閲覧日: 2016年11月30日)

図3 ヴァンダリン (1803) ナイアガラの滝の眺め

<http://www.albanyinstitute.org/details/items/a-distant-view-of-the-falls-of-niagara.html> (最終閲覧日: 2016年11月30日)

図4 ヴァンダリン (1804) ナイアガラ西側の眺め

<https://www.donaldheald.com/pages/books/9866/after-john-vander-lyn-frederick-christian-lewis/a-view-of-the-western-branch-of-the-falls-of-niagara-taken-from-the-table-rock-looking-up-the-river> (最終閲覧日: 2017年1月14日)

図5 チャーチ (1857) ホースシューの滝

<http://www.olana.org/wp-content/uploads/2014/01/Olana-Horseshoe-Falls.jpg> (最終閲覧日: 2016年11月10日)

